

盛口 満 沖縄・珊瑚舎スコール

カタツムリの味

戦前までは食用にされることもあったアフリカマイマイ。

夜間中学の授業では、その体験談に花が咲く。

一方、子どもたちは缶詰のエスカルゴを口にして大騒ぎ――。

沖縄で最も身近な虫の一つ、カタツムリをめぐるゲッチョ先生の随想。

身近なアフリカマイマイ

「キラいな虫は何？」

あちこちの小学校に出かけては、こんな質問を生徒たちに投げかけている。

僕は沖縄県那覇市にある、珊瑚舎スコールというNP O立の小さな学校の講師をしている。

「講師は自活するべし」

小さな学校のため、僕らは暗にこんなモットーを掲げている。僕もスコールとかかわるのは、半日ずつ週2日だけ。残りの日は、近所の大学や小学校へ、出稼ぎ授業へ出かけている。

そんな出張授業の際に、僕が小学生に問うのが冒頭の質問だ。この質問にはいくつかの意味がある。その一つは、沖縄の小学生にとって、「キラいなほど身近な生き物とは何か」を探る意味がある。なぜ「好きな虫」を聞かないのか。それは得てして「好きな虫」への回答はマニアックになりがちだからだ。これに対して、「キラいな虫」の回答は、日常的な出会いが反映される。

ゴキブリやムカデ、それにケムシ。これらの生き物は、問いを発するたび、生徒たちの口端にかかる常連たちだ。さらにこれらの虫の名が挙がるのは、何も沖縄に限った話ではないだろう。

一方で、沖縄ならではの……という回答もある。毎回登場するわけではないけれど、アフリカマイマイがそれだ。アフリカマイマイはその名の通り、アフリカ原産の大型カタツムリである。一般のカタツムリに対し、その殻は海の巻き貝を思わせる、細長い形をしている。大きなものは、その殻の長さは10センチを超えるほどだ。沖縄には1934年頃に移入され、一時に比べ数は減ったが、街中でもその姿を見ることができている。グロテスクなまでの大きさ。それに加えて、寄生虫の中間宿主になること。これら



アフリカマイマイ。殻長83mm。さらに大きくなる。

がアフリカマイマイが嫌われるゆえんだ。

自然には普遍性と固有性の両面がある。「キラいな虫」――「身近な自然」にも、やはりこの両面性は見とれる。人々が当たり前のようにかかわっている自然の中に、その土地の固有性が表れていることもままあるのだ。

小学生たちが「キラいな虫」の一つに数えるアフリカマイマイの名は、お年寄りたちの会話の中でもしばしば登場する。年配者はこのカタツムリをシヨクヨウチンナンとも呼ぶ(チンナンはカタツムリの沖縄語)。アフリカマイマイは元来、「食用になる」という触れ込みで持ち込まれた経緯があるのだ。

「本当、おいしかったよお」

「牛肉のカオリがした」

かつてアフリカマイマイを口にしたという年配者から、こんな話を聞いたことがある。

「本当だろうか」――最初にこんな話を聞いたとき、僕

はどうしてもそう思ってしまった。

カタツムリはおいしい!?

「アフリカマイマイって、アフリカから来たの？ 何で？」

「食用になるっていうことで、わざわざ持ってきたんだよ」

森の中で、生徒たちとそんなやりとりを交わす。

珊瑚舎スコールの高等部での授業の一コマだ。この日は、学校から車で15分ほどのところにある公園にやって来た。公園とはいっても、都市化の進む那覇市内では唯一、まとまった森の残る一画だ。森を覆うのは、イヌビワやクスノキの仲間といった木々である。いわゆる亜熱帯の森だ。そんな木々の下にしゃがみ込んで、僕はカタツムリの観察をしていた。

学校のある沖縄県南部には、アフリカマイマイだけでなく、在来(元々見られる種類)のカタツムリもまた多い。それも知人の貝類研究者の話では、世界レベルのカタツムリの多産地なのだという。

「湿っているから？」

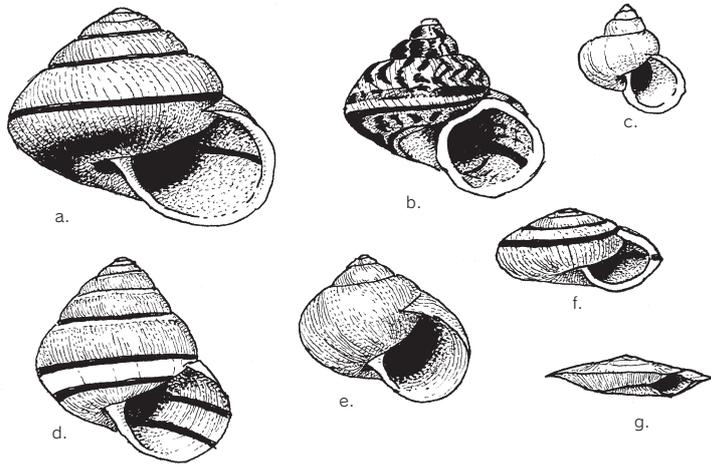
「あつたかいから？」

生徒たちはこんなふうに着う。が、ほかにも大きな理由がある。それは沖縄南部が広く石灰岩で覆われているという点だ。

「殻を作るのに石灰岩が必要なの？」

「そう、そう」

僕らが訪れた公園の森にも、ところどころ石灰岩が顔をのぞかせていた。では、いったいどれほど「多産」なのだろう。森の地面に1メートル四方のワクを張り、その中に転がっているカタツムリをすべて拾い上げてみることに。この拾い上げたカタツムリは、すでに死んで殻だけになっ



沖縄の公園の陸産貝。 a.シュリマイマイ b.ヤマタニシ c.アオミオカタニシ
d.ヤマタカマイマイ e.オキナワウスカワマイマイ f.バンタナマイマイ g.オオカサマイマイ

たものが多いのだけだ。

一口にカタツムリと言っても種類がある。また正確に言うと、カタツムリそっくりなタニシの仲間(ヤマタニシ)なんていうものもある。だから生物学用語では、陸上にすむこれらの貝をひっくるめて、陸産貝類と呼ぶ。

さて、1メートル四方に転がっていたカタツムリやヤマタニシらの陸産貝は、なんと合わせて472個にもなった。「すごい人口密度だね」

生徒たちもあきれている。

472個のうち、一番多く見られたのがヤマタニシで、個体数の96%を占めた。ほかには6種のカタツムリが見られ、中に1個だけアフリカマイマイも見つかった。

沖縄はこんなカタツムリ・アイランドなのだ。そのためか、アフリカマイマイ導入前から、カタツムリの食用利用文化があった(ただし、地域差がある)。利用されたのは、森ではなく草地や畑に見られる、オキナワウスカワマイマイという種類だ。

与那国出身のエミコさん(60代)に話を聞いた。彼女が小さな頃、母親が仕事で不在のときも、子どもが作れるオカズが、例えばカタツムリ汁だったと言っ。

「畑のイモのカズラの下にいっぱいいるの。いったん茹でるんだけど、コツがある。塩を入れて、火をとろ火でじわじわって熱くしていくと、殻の中から身が出てくるわけ。そこを強火にして殺すと、中身がちゃんと出たまま茹でるのよ。せっかちに茹でると、そうならないの。だから茹で方がいいか悪いか、見てすぐわかる。茹でたカタツムリは粘液でドロドロしてるから、一回取り出してよく洗って、塩味の汁にするの。ミカンの葉を入れるとニオイが良くなるわ。けつこう味があるのよね。カタツムリが多ければ多いほど、汁に味がある」

こんな話だ。

ただし、エミコさんは最後に「今は食べようとは思わな

いけどね」とつけ加えた。エミコさんのこの言葉にあるように、現在、沖縄ではカタツムリはまったく利用されることはない。

かつて沖縄では、カタツムリを食べる地域や時代があった。しかし、沖縄生まれの子どもでも、今やアフリカマイマイは「キラいな虫」に名が挙がるだけの存在になっている。珊瑚舎スコールの場合は、本土出身の生徒も半数はいるから、なおさら「カタツムリの味」なんて縁が遠い。だから生徒たちは、森の中で拾ったカタツムリの数を数えながら、「エスカルゴってこういうやつ？」なんて僕に聞く。彼ら彼女らからしたら、遠いフランスのエスカルゴ食文化の方が、耳覚えのある身近な存在なのだ。

「おいしいのかなあ」

エスカルゴに思いをはせて、ある生徒はこう言った。

僕自身、こんな生徒たちと同様の立ち位置にいる。カタツムリの味なんて、非日常の中にあるものだから。

夜間中学の授業は脱線だらけ

「庭にカタツムリ出るけど、害になりますか？アフリカマイマイは害になりますよね」

ヨシコさんが手を挙げて、僕にそんなことを聞く。

月に1回、僕は珊瑚舎スコールの夜間中学で授業を受け持っている。

沖縄には、戦中・戦後にかけての混乱期、満身に義務教育を受けられなかった人たちが少なからずいる。当時は「女は学校へ行かんでもいい」という雰囲気も一部に強く残る時代。そのため、スコールの夜間中学には、60歳以上の女性が多く通っている。中には、80を超えた方もいる。

「戦前はね……」

授業の中で、ごく普通にこんな言葉が飛び交うのは夜間中学校ならではの。しかし、僕はその言葉を聞くたび



上左：アマノヤマタカマイマイ。カタツムリの眼は柄の先端につく。上右：アオミオカタニシ。ヤマタニシ、オカタニシの眼は根元につく。
下左：ヒラコウラベッコウ。下右：ナメクジ。ナメクジはカタツムリの殻が退化したもの。

にドキリとする。あの沖縄戦をくぐり抜けた人たちが目の前にいるのだ、と。

それでも夜間中学の生徒たちは、授業の中では過酷な体験談をひと言たりとも口にしない。むしろ、授業の場はいつも笑いに満ちている。

授業は脱線の連続だ。

皆、いろいろな意味で、人生経験が豊富なのである。加えて、沖縄各地で風習も自然も微妙に違う。一人が何かを口にするやいなや、「わたしは〇〇だった」「いや、わたしのところは△△だった」と、授業そっちのけで皆が一斉にしゃべり出す。このひとときがたまたまなく面白いのだから。

この日も、ヨシコさんのカタツムリ発言で、皆がカタツムリモードに入り込む。

「この前、黒いカタツムリを見たけど、初めて見るよー」
「昔はカタツムリ食いよった。お汁にして。身は食べないでダシとった。今考えると、気持ち悪いねー」

「アフリカマイマイも食いよった。茹でてぬめり取ってから食べたよー。あと茹でたやつ、豚のエサにもしたねー」

「戦前はアフリカマイマイ、箱に入れてわざわざ飼ってましたよ。まだ珍しいものでしたからねー」

ちよつと収拾がつかなくなるほど、やりとりが続く。

学校は想像力を鍛える場

「これは貝。貝なんだ。見ないで食べよう」

ツワが自分にオマジナイをかけている。

珊瑚舎スコールの高等部の授業に、エスカルゴの缶詰を持ち込んだ。中身をフライパンにあげ、油で炒め、塩・コショウをする。出来上がった一品を前に子どもたちは大騒ぎ。

「初めてカタツムリが胃の中に入った！」

ケースケがそう叫ぶ。

「おいし〜」

一口食べて、普段無口なトモは、ポツリとそう言った。

「味は悪くないけど、カタツムリと思うと……」

ツワは何だか複雑な表情だ。

「何かコマツナっぽくない？ 草の味がするようない……」

ケースケの味の感想はこうだ。

エスカルゴは、食用カタツムリとして、つとに有名だ。そのエスカルゴでも、素材自体はたいした味じゃない——と、食べてみて思う。

一方、夜間中学の授業の場では、「アフリカマイマイは、その当時、ご馳走だったさ〜」なんて声上がる。その当時、というのは戦中・戦後の食料難時代のことだ。その時代と切り離れた中で、アフリカマイマイの味は語れない。つまりその味は、その時代を体験したものにしか絶対にわからない味なのだ。

だが、思う。僕たちは絶対にわからない味があるということに気づけるものだと。その上で、その味を想像することもできるのだと。

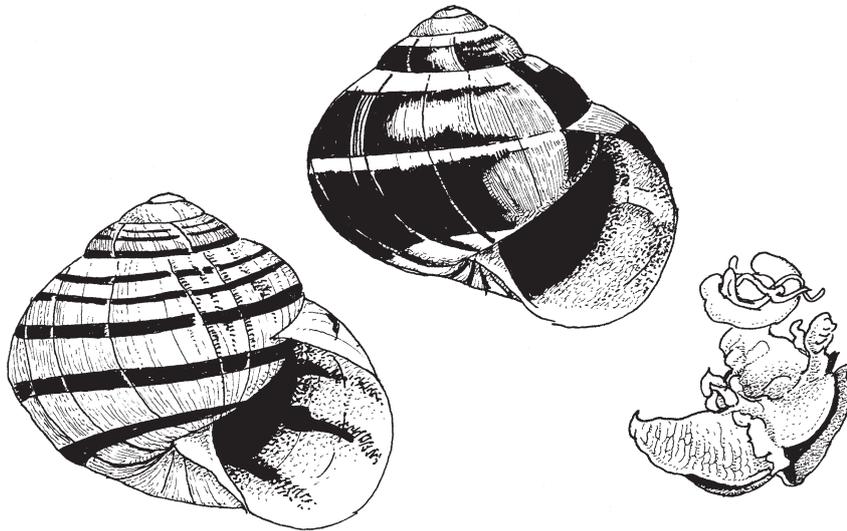
学校という場は、そんな想像力をこそ鍛えるところ。

これがスコーレの校長、ホシノさんの口にする言葉だ。だからこそ、学校には、他者の存在が重要だ、と。近頃の教育現場や社会における諸問題は、僕たちの想像力が弱まっていることに起因しているのでは？ とふと思う。

夜間中学の授業のたび、ドキドキしている僕がいる。「ヘビの死体とか見たら、センセイの顔を思い出すようになったよ」

それでも最近、夜間中学の生徒にそう言われるようになった。

人間は本来、いくつになっても想像力や好奇心の尽きない生き物だ——夜間中学にかかわることで、僕こそがこんなことを教わっている。



エスカルゴの殻と、缶詰の中身



もりぐち みつる

1962年、千葉県生まれ。千葉大学理学部生物学科卒業後、自由の森学園中・高等学校の理科教諭。2000年より沖縄に移り住み、フリースクール「珊瑚舎スコレ」の活動等に携わる。『ほくは貝の夢をみる』（アリス館）、『教えてゲッチョ先生！昆虫の？！になる本』、『雑木林は不思議な世界』（共に山と深谷社）、『ほくのコレクション』（福音館書店）、『青いウラゲを追いかけて』（講談社）、『トングリの謎』、『冬虫夏草の謎』（共にどうぶつ社）、『骨の学校』、『生き物屋図鑑』（共に木魂社）など著書多数。

早川 千晶 ライター(ケニア・ナイロビ在住)

スラムで生きる子どもたち

掘っ立て小屋が延々と連なる路地裏で見つけたのは、満面の笑顔で歌を歌う子どもたちの姿だった。どんなに過酷な境遇にあっても、懸命に生きようとする子どもたち。著者の人生を変えたスラムの子どもたちとの出会い。



ナイロビ市内から車で約15分。高級住宅街を過ぎると突然、トタン屋根の家並みが広がり始める。崩れかけたような土壁に、錆びきったトタンをかぶせただけの掘っ立て小屋。それが延々と軒を連ねる。狭い路地を埋め尽くす人、人、人。人口80万人、ケニア最大のスラム、キベラだ。私はそこで、孤児や虐待を受けた子どもたち、元ストリートチルドレンなどのための駆け込み寺を運営している。スラムの仲間たちとともに力を合わせてつくった「寺小屋」では、現在、160人の子どもたちが楽しく勉強している。

世界中を放浪した末に

18歳の頃、私は生まれ育った日本社会の中で、たまらないむなしさに襲われて放浪の旅に出た。世界中を旅した末にたどり着いたところ、それがアフリカだった。アフ

リカ奥地の砂漠やジャングルで、過酷な条件のもとに生きる人々がいかに助けあい、わずかな食糧を分けあいながら生きていくかを目の当たりにして、人生がひっくり返るほどの衝撃を受けたのだ。しかも、彼らは人生とても楽しんでいた。底抜けに明るい笑顔で、命を輝かせながら生きていた。そんなアフリカの人々に魅了され、私は長い旅の末にナイロビに仕事を見つけ、定住した。

ケニア人の同僚たちと働きながら、ケニア社会の表から裏までを知っていく経験はとても楽しかった。しかし同時に、ナイロビの不条理な現状にやりきれない想いを抱くことの連続でもあった。

ケニアは貧富の差がとても激しい国だ。お金さえあれば、豊かな国々と変わらない何不自由ない暮らしを送ることができる。それなのに、多くの庶民にとって、まともな仕事に就ける機会はありません。劣悪な条件下で低賃金労働を強いられ、満足な医療を受けることもでき

ない。ナイロビでの暮らしは、そんな不条理を常に目の前に突きつけられる混沌とした生活だった。世の中は、なぜこんなにも不公平なのだろうか。

浮浪児があふれかえるナイロビの街に、私は毎日通勤した。なぜ私は恵まれた日本人として生まれ、なぜ彼らはたまたま路上の浮浪児として生まれたのか。その理由がいくら考えてもわからなかった。単なる偶然なのだと納得することはできず、いつも心の奥底に消化不良の思いがこびりついていた。かつて日本の社会の中で感じていたむなしさは、アフリカで暮らし始めてからも決して解決してはいなかった。

私は会社の昼休みや夕暮れ時に、街の中をあてもなく、ひたすら歩き回った。歩きながら、すれ違う人波の一つ一つの顔に目がいった。たくさんの人が、それぞれの人生を抱えながら生きている。輝いている顔もあれば、疲れ切った顔もある。幸福とは何なのか。何によって幸せの度

合いを測れるのか。その基準が私にはわからなかった。私はそれをたまらなく知りたかった。

キベラと出会ったのは、そんなやり場のない思いを抱いて、悶々としていたときだった。

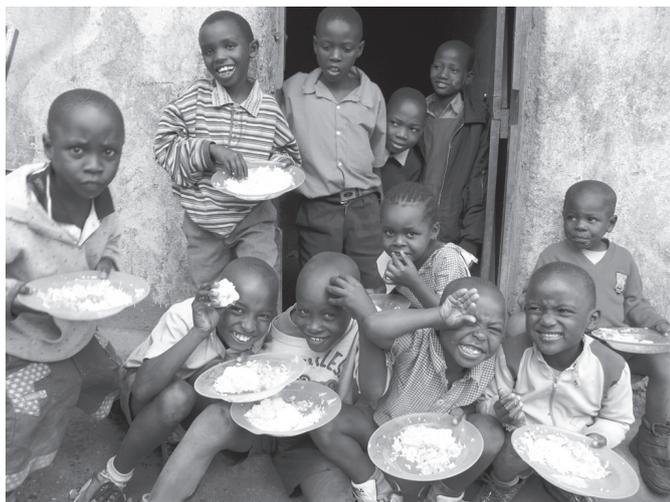
子どもたちとの衝撃的な出会い

キベラの中に入り込むと、まったく別の世界にワープしたような気分になる。にぎやかな生活のざわめきが、そこから中から聞こえる。大工、床屋、揚げパンを売る女性、もうもうと煙を上げる焼肉屋、野菜売り、包丁研ぎ屋、バケツ直し屋……。忙しく働く人々が路上にあふれ、そのすき間を縫うようにして、はだしの子どもたちが歓声を上げて走り回る。ゴミだらけのドブ川でブタたちがころげ、ヤギの群れやニワトリが歩き回る。圧倒されるような活気に満ちているのが、キベラ・スラムだった。

キベラは、地方での生活が困難を極めた人々が職の機会を求めて都会に出てきた、出稼ぎ者の集まる貧民街だ。干ばつや洪水などの天災に見舞われ、畑や家畜を失った人々。農村の爆発的な人口増加によって生きていくために十分な土地がない貧しい農民たち。病気のまん延で打撃を受けた貧困者……。各自の事情はさまざまだが、彼らは流れ流れてキベラにやってくる。ほかにはどこにも生きていく場所がない、という人がほとんどだった。

夜明け前の朝5時頃は、スラムから職を求めて街や工業地帯に徒歩で向かっていく人々の大ラッシュアワーだ。これでもか、これでもかというほどのすごい人数が、真っ暗闇の中をぞろぞろとスラムから歩いていく。なんと少しでも生きていくのだ、という気迫を感じさせる人波だ。

こうしたキベラの中を初めて歩いていくとき、路地裏から元気な子どもたちの歌声が聞こえてきた。いったいどこから聞こえてくるのだろうか？と耳を澄ませながら、



路地に沿った掘った小屋をのぞいていった。そして、見つけた。小さな窓からひよっとのぞくと、崩れかけた土壁の狭い部屋に、子どもたちがぎゅっちりと詰まり、手拍子を叩きながら元気に歌を歌っていた。真っ暗闇の中で、夜空に輝く星のように、無数の目がキラキラと輝いていた。

「今日も楽しい一日をありがとう！ 私たちが生きていられるのは神様のおかげです。生きているって素晴らしい。さあ、この命を讀ませて、歌おう！」

子どもたちは、満面の笑顔で声を限りに歌っていた。私はその姿に衝撃を受け、しばしその場に立ちすくんだ。いったいここは何なのだろうか？ 少なくとも50人くらいの子どもたちが、土がむき出しの床にそのまま、肩を寄せあつて座っている――。

そばにいた大人たちに聞いてみた。

「学校ですよ」

戸口に立っていた男性が、ニコニコしながらそう答えた。学校？これが学校だつて？ 机もいすもない。教科書も黒板もない。いったいだれがやっている学校なのだろうか？

「私たちスラムの住民がつくっている学校です。孤児の子どもたちを集めて勉強を教え始めたら、いつの間にかこんなにたくさんになっていきましたよ」

のんびりした口調で彼はそう説明した。高校を出たが仕事がない近所の若者たちが、勉強を教えに来てくれるという。長屋のおばちゃんたちも食べ物を持って来てくれたり、子どもたちの世話を焼いてくれる。彼は農村からの出稼ぎ者だったが、肉体労働をして稼いだお金でおかゆを作り、路上の浮浪児たちに持っていく、いっしょに食べて語りあう、ということをしてきた。そのうち一人、また一人と、彼についてくるようになったという。

私は、その話を聞いて耳を疑った。自分も食うや食わずの貧しい生活をしている人々が、路上の浮浪児に食べ

物を運んでいるなんて。そんなことできるわけがないと、にわかには信じられなかった。

それから私は、足しげくスラムに通い始めた。とにかく知りたかったのだ。彼らがどのようにして生き抜いているのか。彼らのあの活力の源は何なのか。これほどまでに厳しい生活状況の中で、なぜ絶望せずに笑顔でいられるのか。

生きることをあきらめない

私は、昼休みに会社を抜け出してはスラムに通った。通い続けるうちにスラムの中に多くの友人ができ、さまざまなことを知るようになった。

初めて足を踏み入れたときに出会った小さな学校——スラムの住民が自分たちの手で始めた寺子屋は、スラムの中に無数に存在していた。その日暮らしのスラムの人々は、子どもを公立の学校に行かせるだけの金銭的な余裕がない。それならば自分たちの手で学校をつくらうと、政府から何の支援も受けられないのに、近所の人々がお金を出しあつて教材を買い、子どもたちが集う場所をつくつたのだ。

スラムではあつけなく人が死に、次々と孤児が出る。親を失つて取り残された子どもたちがスラムの住民に引き取られて育てられているのは、日常茶飯事だった。スラムのだけれど、自分の生んだ子どもは5人だが、引き取った孤児は2人、という具合に、自分の家族ではないだれかの面倒をみていた。

彼らは、極限状況の中でサバイバルしていく技に長けていた。彼らの生活はさまざまな工夫と助けあいがある。私には彼らから、そんな彼らの生活に潜んでいるさまざまな秘密を一つ一つ学んでいき、とても大切な人生の学びを受ける



ようになった。彼らは身をもつてそれを示してくれた。どんな状況であっても、生きることを決してあきらめないこと。何もないところから何かをつくり出していくこと。そして、生きるからには、その瞬間瞬間を思い切り楽しんで生きるということ——。

私はやがて、スラムの人々とともにさまざまな活動を行うようになった。何もないところから、工夫をすること。何かをつくり出していく。それは、スラムの人々がその生活ぶりからヒントをくれたことだ。

私はやればやるほど、面白くなってきた。貧困者たちでグループをつくり、アイデアを寄せあつて共同で物を作り、商売を始めた。そして、そこから発展してみんなで寺子屋をつくり始めた。長屋の一室に20人の孤児たちを集めて始めた寺子屋は、ウワサがウワサを呼んでどんどん子どもたちが増えていった。私はついに会社を辞めて、スラムでの活動に没頭するようになった。

神様、学校に通えますように

私たちがつくつた学校は、マゴソ・スクールという。設立から8年が過ぎた今では、幼稚園から小学8年生まで160人の子どもたちが通う学校になった。その多くは、親や住まいを失い、労働力としてスラムに連れてこられた子どもたちや、路上で生活せねばならなかった浮浪児、虐待を受け続けた末に命からがら逃げて来た子どもなど、それぞれにひと言では語り尽くせない事情を抱えた子どもたちだ。

15歳のトニーは、寝泊りしていた空き地から学校に通つてくるようになった。彼の両親は離婚し、父親のもとにやつてきた後妻は彼をひどく虐待したあげく、路上に捨てた。離縁されて貧しい農村に戻つた実の母親は、借金を抱えて夜逃げし、行方不明のままだ。彼は浮浪児仲間

たちと空き地で寝泊りしながら、ゴミを拾ってくず屋に売り、何とか生き抜いてきたが、夜寝るときには必ずお祈りしながら寝ていたという。「神様、目が覚めたときには僕に家があり、通える学校がありますように……」と。

私が初めてスラムの空き地でトニーに出会ったとき、彼は蚊の鳴くような声で「ほかには何もいらなから、僕は学校に行きたい」と言った。その場で私はトニーを学校に連れて行き、しばらく空き地から通っていたが、そのうち教室に寝泊りするようになった。それから、かれこれ2年の年月が経った。今ではトニーはマゴソ・スクールの子どもたちのリーダー的存在になっている。

10歳のアピヨは、血だらけになって夜中に走って逃げて来た。彼女は貧しい農村に生まれ育ったが、6歳のときに両親が病気で立て続けに死に、兄に連れられてキベラ・スラムにやって来た。兄はキベラで肉体労働をしていたが、アルコール中毒だった。夜になると泥酔して、悪霊を追い払うのだと叫びながら、目の前にいるアピヨを虐待した。マゴソ・スクールに逃げてきたとき、アピヨはうつろな目をして震え続け、口をきくことさえできなかった。夜になると、叫び声を上げながら飛び起き、暗闇の中で父親と母親を呼び続けた。

そんなアピヨを助けたのは、12歳のアギーという女の子だ。アギーは母親と3人の弟妹たちとともにマゴソ・スクールに住んでいる。貧困のストレスからアルコール中毒になった父親に、母親と子どもたちは苦しめられ続けてきた。マゴソ・スクールにやって来てから、母親は学校で給食作りの仕事をしながら洋裁教室の生徒になった。子どもたちも全員が学校で勉強できるようになり、とても喜んでいる。父親から虐待を受けて、深い心の傷を負っていた長女のアギーは、いつも口数が少なく、悲しい目をした少女だった。ところがアピヨがやって来てから、アギーはアピヨをとててもかわいがり、いっしょの布団で寝て、夜



中にうなされて叫ぶアピヨを抱きしめて優しく慰めるようになった。寄り添いあう二人は、だんだんと笑顔が出るようになった。

13歳のエミテワは、母親が病気で死んでから、悪徳の親戚に売り飛ばされて、子守りの仕事をさせられていた。5歳と7歳の弟たちも別々に農場に売られていた。キベラ・スラムに出稼ぎに来ていた父親が、死に物狂いで1年かけて子どもたちを探し出し、マゴソ・スクールに連れてきた。その父親も、エイズの末期でほとんど寝たきりの状態だ。エミテワは、放課後や休みの日に子守りや洗濯の仕事をして小銭を稼ぎ、父と弟たちの生活を支えている。

弟は働かされていた農場でひどい虐待を受けたらしく、精神が安定していない。

この子どもたちは、マゴソ・スクールに来てから大きな変化を見せている。学校に来られるようになったからといって、彼らの人生の過酷な現実には簡単に変わるものではない。だが、少なくとも学校には仲間がいて、歌ったり、踊ったり、勉強したりという楽しみがある。質素だけれど、お腹を満たす給食を食べることができ、頼りになる先生がいる。何よりも、自分はマゴソ・スクールの生徒だというよりどころが、彼らの心を支える重要なアイデンティティーになっている。

タイコの音が心の傷を癒す

深い傷を負ったこの子どもたちが、劇的に変化し始めるきっかけをつくってくれた人物が、約3年前にマゴソ・スクールにやって来た。私の友人で、日本の路上でタイコを叩いていたミュージシャンの大西匡哉だ。彼は3歳のときに母親が自殺し、15歳まで施設で育った。中学を卒業してから施設を出て自立し、工場や新聞配達の仕事しながら一人で生きてきた。あるとき、横浜の駅前でタイコを叩く人を見かけた彼は、自分も叩きたいと思い、タイコを買いに行つて、そのまま駅前で一心不乱に叩いた。ふつと気がつくと、自分の周りに人だかりができていて、声援とお金が飛んできた。それから彼は、タイコ一つを手には日本中を旅して回るようになった。

タイコを叩くと、閉じこもっていた自分が解放されていくようになった。日本全国さまざまな町で、彼のタイコの音を足を止め、じっと聞き入る人々がいた。タイコは匡哉が初めて持った言葉であり、社会に対して働きかける手段だった。旅が続くにつれ、社会そのものに対する怒りや悲しみも、どうでもいと思えるようになった。そんな旅

は、彼をアフリカまで連れていくことになった。

匡哉はマゴソ・スクールにやって来て、タイコを叩いた。子どもたちはそれに大きな反応を示した。トニーはすぐにタイコを手にして、匡哉をまねて叩き始めた。ほかの子どもたちはタイコに合わせて歌い、踊った。匡哉は多くを語らない。彼が叩くタイコの音が、言葉よりも雄弁に子どもたちに何かを伝え、彼らの痛みをほぐしていった。子どもたちはみるみるうちに変化していった。アビヨやアギーも、イキイキとした表情で歌うようになった。とんがっていたエミテワの顔は柔和になって、よく笑うようになった。

やがて私と匡哉は、子どもたちとともに歌のCDを作りに始めた。電気のないスラムに録音機材を運び込み、ソーラーパネルで電源を取りながら、毎日皆で歌い、録音をした。長い時間をかけて制作したCDが出来上がると、皆で飛び上がって喜びあつた。2005年6月に出来上がった初めてのCD「Twende Nyumbani（おうちへ帰ろう）」は日本で大きな反響を呼び、これを聞いた多くの人々から心こもったメッセージをいただいた。

「元気が出た」「生きていく勇気をもらった」と、涙を流しながら感動を伝えてくれる人々がいた。何度も自殺未遂を繰り返していたという日本の少女が、「もう私は決して死のうとしません」と書いた手紙をくれた。これらのメッセージをマゴソ・スクールの子どもたちに伝えると、子どもたちは大いに喜んだ。まるで、歌を通じて心のキャッチボールをしているようだった。励ましあい、勇気づけあうことで、ケニアと日本の両側で命の力が相乗効果を起こして活性化していく様子を間近に見て、私は震えるような感動を覚えた。互いに癒しあい、自分を苦しめた経験を克服して新しい歩みを始めた子どもたちは、さらにもう一步深く突っ込んで自らを開き始めたのだ。

少年の命を救った子どもたち

2枚目のCD制作に取り組んでいる最中に、14歳のカテンベが重体に陥った。極度の発育不良で14歳なのに体重が20キロしかなかったカテンベが、腎臓病の末期で枯れ木のようにやせ細り、立つことも歩くこともできなくなった。カテンベの命を救うには腎臓移植手術が必要だと、医者から言われた。子どもたちは「カテンベ、死なないうで」と祈り、泣き、カテンベを救うために自分たちは何ができるのかと話しあつた。

2006年9月に完成した2枚目のCD「Milele（永遠に）」は、闘病中のカテンベも1曲歌い、トニーやエミテワたちもソロを歌って制作。その売り上げの一部をカテンベの医療費に寄付することとなった。

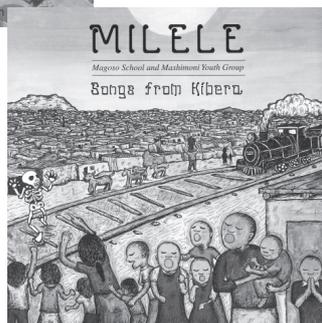
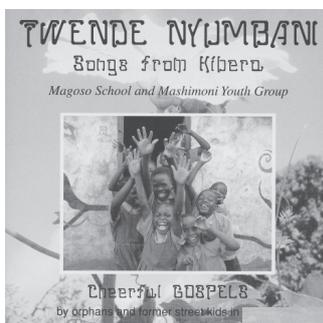
同年10月26日に、カテンベは母親から腎臓の一つをもらい、手術を受けて一命を取りとめた。カテンベの手術費用を得るために私と大西匡哉が立ち上げた基金には、日本の多くの子どもたちも協力してくれた。日本の子どもたちは、アルミ缶を集めたり、フリーマーケットを開催したりして、カテンベを救うためのお金を集めたのだ。そんな子どもたちの中には、学級崩壊しているという学校の子や、ひどいじめを受けて失語症になった子どももいた。カテンベのために祈り、行動するマゴソ・スクールの子どもたちと、日本の子どもたちは、心を一つにして手を取りあつた。

この子どもたちにかかわるようになってからの数年間、私自身も新しい命をもらったかのような毎日だった。子どもたちの魂と感受性は驚くほど柔軟だ。どんなに傷ついても、人はまた再生できるのだということ、魂は互いに癒された。そして、助けあい、支えあうことで、魂は互いに癒しあつて生きる力を高めていくのだということ、ケニアと日本の両方の子どもたちが教えてくれた。

キベラの人々とともに、私たちは創意工夫をめぐらせながら、あの手この手でマゴソ・スクールの運営している。スラムの厳しい環境の中で、彼らのよりどころとなる場所をみんなで見つけようにつくり上げていく作業は喜びが大きい。喜びは分かちあうと何倍にも増大していき、悲しみは分かちあうと乗り越える勇気をもらえる。かつて私が日本やナイロビの暮らして感じていた、やりきれないむなしさを、私はもう感じることはない。

生命はつながりあい、循環しているということ。そして、それぞれの状況の中で精一杯生きることの尊厳をキベラ・スラムの人々が教えてくれた。これからも、ケニアと日本の子どもたちとともに、循環する命の輪を無限大に広げていきたいと願っている。

※キベラ・スラムの子どもたちが歌ったOの日本販売窓口は以下の通りです。
フラヒエ・アフリカ・エドレイト（アフリカ）
電話022-249-8846
e-mail:frahien@gold.ocn.ne.jp



はやかわ ちあき
1966年、福岡県生まれ。1986年よりアジア、ヨーロッパ、アフリカなど世界各地を旅行。1990年にケニアのナイロビに定住する。ナイロビの旅行会社に9年間勤務した後、フランスに。現在は執筆活動のかたわら、ナイロビ最大のキベラ・スラムでストリート・チルドレンのための学校運営やスラム住民の生活支援、日本各地での講演活動などを行っている。主な著書に『アフリカ日和』（旅行人）、『輝きがある一世界の笑顔に出会う瞬間』（出版文化社）など。

